



いのち

十一月という響きひびに瞬またたく間に去り行く月日の早さを感じます。

あれだけサンサンと照りつけていた太陽も柔やわらかい日差しに変わり、青々と輝いていた木々も徐々に色付きはじめました。

自分自身、今既すでに時の過ぎる早さを痛感しているのですが、それでも

お参り先でご門徒の方々が一年齢を重ねるほどもっと時間が経つのが早くなるよ。」と口をそろえてお話し下さることに、恐ろしさすら覚えます。

私の「いのち」

長い歴史を振り返っても私は一人しか存在しません。そしてこれから先も二度と誕生することのない私の「いのち」です。一日一日もあつと
いう間に過ぎていきます。しかしその瞬く間の一日も二度と繰り返されることがありませんが、この一瞬一瞬が無数の縁によつて支えられ成り立っている、まさに偶然おとづと驚おどろきの時

なのです。

ところが毎日が当たり前に繰り返されていくように感じていると、そこへの感動は薄れ、感謝することなど考えられなくなってしまうものなのです。

『仏説無量寿経』というお経さまに、人の姿を「人在世間 愛欲之中 独生独死 独去独来」（人は世間の情にとらわれて生活しているが、結局独り生れ、独り死に、独り来て、独り去るのである。）とお示しになり、さらにその後「身自当之 無有代者」（みずから之を受ける。変わる者有ること無し）と誠に厳しいお言

葉で顕あつされています。

このお言葉。私の人生は誰にも代つてもらふことは叶かなわず、さらには孤独こどくな人生を淋さみしさでしか終われない存在であるということを示す為だけに説とかれたお言葉なのでしょう。

阿弥陀如来という仏さまは私が気付くよりはるか前から、この生死真つ只中の私の「いのち」をお救いの目当てとされ「ひとりじゃないんだよ。共に歩んでいこう」と名乗って下さった仏さまです。そのお心は南無阿弥陀仏という言葉の仏さまとして、私に満ち満ちてくれたのでありました。

孤独で終わるはずの人生に、「終わりじゃないんだよ。仏と成り、始まると思っておくれ」とその意味を転換して下さった仏さまでありました。

誰もがそれぞれの人生を歩みながら、散っていくのではなく、共に浄土という一つ処で再び会わせて頂ける。そのことを思うとき、別々の「いのち」は、つながっている「いのち」であり、あたたかく共に輝いていける「いのち」に生かされてある私の姿がありました。

風は私の目には見えません。しかし私の頬ほほをなでてくれた時、確かにそこにある風を感じました。それは

頭や唇で、考えているよりも肌で、全身で感じる事ができた『秋』という季節でした。阿弥陀様のおはたらきもこの事に似ているように思うのです。

言葉になつて耳で聞かせて頂く。文字「経」となつて触れさせて頂くことでそのおはたらきを感じられることができるのではないのでしょうか。

私が以前考えていたことの一つに仏教を学んでやろう、覚えてやろうという思いがありました。頭だけは大きくなつていきます。たまには「へえ〜」と思うことがあつても心には全然響いてきません。

そんな私が阿弥陀様の救つてやる

という願いではなく、救わずにはおれないんだというお心に会わせて頂く。慈しみ悲しんでおられるお心を聞かせて頂く。そうした中で仏教を学んでやろう、覚えてやろうと思っていた自分がいつの間にか仏教に教えられていたことに気付かされたのです。

自分から聴いていたつもりが聞かしまえられていた。願うより前、思うより前に願われていたおはたらき。南無阿彌陀仏というお言葉は頭で考えて発するのではなく私を包み込んでくださるおはたらき。南無阿彌陀仏の中で生かされていく「いのち」。

深く味わっていききたいものですね。

十二月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 十二月七日(金)～十一日(火)

講師 福井教区吉田組崇敬寺
瓜生順法師

○後期 十二月十三日(木)～十六日(日)

講師 未定

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、
ご聴聞に来院くださいますよう、お待ちしております。
おります。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (011-34) 221074
FAX (011-34) 291408
テレホン法話 271-1616番